

平成24年度 第5回 宮崎県特別支援教育研究連合知的障害教育研究部会研究大会 レポート

【教育記念講演】

発達障がいの特性に応じた教育的支援について

講師 小野 真嗣 氏 (みやざき中央支援学校)

本講演は、地域のコーディネーターとして、特別支援学校と特別支援学級双方の現状からお話しされました。

- ・ 支援学校の生徒数も支援学級の児童数も増加している。
- ・ 将来的に、支援学級から支援学校へと進級・進学することもあるので、支援学校の専門性を活用し、タイアップしながら、連動させていく必要がある。
- ・ 指導をよりよくするためには、実態の把握が重要で、特性の理解、関係性の理解、複数の児童と先生、保護者の関係性など、目標設定に必要なことを十分理解する。
- ・ 長期的な視点に立つと、余暇の範囲が狭いので、余暇の支援も必要となる。支援学校で、「部活動での活動で輝ける」生徒は輝いているし、生活に張りがある。
- ・ 発達障がいは、『発達でこぼこ』と考え、自信を失ったり、トラウマとなったりしないように、指導においては、「不安の解消」「首尾一貫」「単一焦点・単一路線」で、個人資料・教育記録データ・教材の引き継ぎなどが大事で、適切な行動を増やし、社会に出たときに必要な力を付けるようにしたい。

事例を交えながら、児童生徒が社会に出たときに、暮らし、働き、楽しめることを目指した長期的な目標をもって指導をする必要性の確認ができました。



【実践報告Ⅰ】 テーマ『『共に生きる力』を育む教育を目指して』

みやざき中央支援学校

1. 共に生きる力について～

【発表】 田爪昭宣 教諭

研究の仮説を「共に生きる力」の構造をもとに、広くキャリア教育を考える視点から児童生徒一人一人の指導内容や方法及び支援の在り方の工夫・改善を図れば、望ましい成長・発達が促され、「共に生きる力」をはぐくむことができるであろうとし、各班で研究が進められました。「共に生きる力」を①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択⑥働く力⑦経済生活への参加能力⑧その他に分けられた構造図がとてもよくまとめられていて参考になりました。

2. 小学部「児童の自主的活動を育てる授業づくり～生活単元学習：単元の組み立ての工夫をとおして」

【発表】 嶋田千奈 教諭

① 小学部重複学級の教育課程に23年度より生活単元学習を入れ、自立活動や各教科等の指導内容の整理を行い、違いやつなかりを理解し、かわりを深めていくことができるのではないかと。

② 児童の自主的活動を促すために事例研を通して検討・実践する事で自主的活動のできる児童を育成することができるであろう。

という2つの仮説にもとづいたいろいろな実践例がまとめてありました。具体的な手立ても示してありとても分かりやすい発表でした。

3. 中学部「キャリア教育の視点に立った学習内容の改善・充実 キャリアステージを活用して」

【発表】曾根みどり 教諭

キャリア教育の視点から段階を考え、「キャリアステージ」と名付けたキャリア教育発達段階を作成し、活用していました。学年末に個々の生徒について、その学年でのキャリアステージの段階をチェックしたものを引き継ぎ資料として残したり、個々の生徒の、今年度のキャリア教育全般における目標設定にも活用していました。「キャリアステージ」の段階表が検討・改善され、より使いやすいものを目指して進められていて良かったです。

4. 高等部「自立と社会参加に向けた学習内容と授業づくり 卒業後の進路を見据えて」

【発表】鈴木敬子 教諭

特別支援学校卒業後の社会生活の充実に向け、「必要だから」という視点で学習内容の厳選と授業作りの工夫に取り組んだ報告でした。8つのグループに分かれ、指導方法の改善、教材と教具の開発、年間指導計画の見直し、実践の研究（授業作り）について研究が進められました。例えば生活単元学習と国語・数学班では、国語で履歴書の書き方や挨拶の仕方を学んだり、数学で金銭管理、お小遣い帳のつけ方を知るなど、実生活に役立つ内容の実践でした。自立と社会参加は数年後に迎える社会生活と深く関わることなので、特に興味深く聞かせていただきました。

5. 訪問教育学級「訪問教育における豊かな伝え合いをめざして」

【発表】田爪昭宣 教諭

生徒が周囲の人と豊かに伝え合い、生き生きと活動できるような取組として、季節を感じさせる自然に触れさせたり、音楽を活用した授業を行ったりするとともに、病院／学校／地域の人と交流できるようコーディネートしているという報告でした。ビデオ映像による実践発表から楽しい授業の様子が伝わってきました。



【実践報告Ⅱ】みなみのかぜ支援学校

1 小学部 「児童が生き生きと活動する授業作り」

～人との関わりを大切にしながら、個の実態に応じた教材、授業展開の工夫を通して～

【発表】児玉奈々 教諭、野辺明美 教諭

2 中学部 「生徒一人一人のコミュニケーション能力の向上を目指した授業づくり」

～自ら選択し、自主的に取り組む活動を通して～

【発表】日高道子 教諭

3 高等部「社会生活を見据え、豊かに生きる素地を培う作業学習

～キャリア教育の視点からのアプローチ～

【発表】池田祥子 教諭、久枝美紀 教諭

『児童生徒一人一人が確かに伸びる授業の創造』をテーマに、各学部に発表してもらいました。

小学部下学年では、音楽や体育の授業を通して、先生や友達に合わせて動くことで模倣する力や協調性を身につけさせ、中学年から上学年にかけては、体育や生活単元学習の授業の中で、言葉での表現が苦手な生徒に対して、絵や手話を用いて自己表現させる取組が紹介されました。ポイントをしばって授業に仕掛けをしていくことで、児童が学ぶことを楽しみながらコミュニケーションを図れるようになっていく様子を、写真や映像を通して知ることができました。

中学部では、会話が苦手な生徒に、日誌の文章書きを減らし、自分の気持ちや状態に合うものを選択肢の中から選ぶようにさせたり、うれしいときや嫌なときの気持ちを視覚的なもので掲示し、場面にあったものを選ばせたりするなどの工夫で、コミュニケーションの苦手な生徒がうまく自分を表現するための実践例が紹介されました。

高等部では、以前からある『カフェレインボー』にキャリア教育の視点を取り入れた研究

を発表してもらいました。これまでそれぞれで活動していた7つの班を見直し、生徒全員でカフェに関わりを持ちながら運営するよう意識させ、さらに働く喜びを実感しやすいような班活動に改善されていました。自分の役割を果たすことで、心技体のバランスを取りながら、基本的な生活力を身につけ、場に応じた自己表現力を培っていく様子がみられました。既存のカフェの中に小さな社会をつくり、活動の中でコミュニケーション力を向上させる取組でした。

最後に、各学年での取組を通して、児童生徒一人一人がコミュニケーション力をつけ、社会性や意欲を身につけさせていくとともに、今後も研究を続け、キャリア教育を小中学校で一貫したものに位置づけていきたいとまとめられました。



【実践報告Ⅲ】「自立と社会参加を促すための小・中・高一貫した支援の在り方」

日南くろしお支援学校

【発表】 國丸ゆかり 教諭、庄田圭 教諭、川添猛史 教諭
清水陽子 教諭、藤澤ひとみ 教諭

平成21・22年度に宮崎県教育委員会研究指定「特別支援学校における職業教育及び進路指導の充実」を受け、その成果と課題を踏まえ、平成23年度のキャリア教育に視点を置いた小学部・中学部・高等部・訪問教育部での取組を発表していただきました。

子供たちの最終的な目標である「自立と社会参加」をめざし、キャリア教育の視点での年間指導計画の見直し、感覚統合の視点を取り入れた学習活動や教材の工夫、進路の指導や年間指導計画の見直し等、実践に基づいた研究は、学校種を問わず、参考になるものでした。訪問教育部からは、教材・教具の紹介もあり、実際にもって来て掲示して下さいました。



【実践報告Ⅳ】 児湯るびなす支援学校

「生きる力を育む教育を目指して～小・中・高一貫した教育課程の編成～」

1 生活単元学習の年間指導計画及び内容

【発表】 柴下美緒 教諭

2 道徳の年間指導計画及び内容

【発表】 岩田知子 教諭

3 作業学習の年間指導計画及び内容・評価表

【発表】 郡司毅 教諭

4 算数・数学の年間指導計画及び内容・評価表

【発表】 中島真樹 教諭

5 図工・美術の年間指導計画及び内容・評価表

【発表】 渡邊裕文 教諭

本講座は、平成25年度の高等部設置を受け、教育課程編成を行うため、小・中・高で一貫してつけさせたい力を整理し、それらをもとに作成した年間指導計画及び内容・評価表の報告がありました。

12年間を見通して内容が系統的に整理され、指導が継続的かつ一貫して行うことが期待できます。特別支援学校はもとより、小中学校の特別支援学級だけでなく通常の学級、そして高等学校にも広く共有ができると、県全体で一貫した指導が期待できると思いました。



【実践報告Ⅴ】

本講座は、都城きりしま支援学校小林校が2カ年計画で取り組まれている研究と、都城きりしま支援学校が平成22年度から取り組まれている研究の実践を報告されました。

(1) 「自立や社会参加を促す指導・支援の在り方」

①小学部『キャリア教育の視点を踏まえた「日常生活の指導」の在り方について』

【発表】都城きりしま支援学校小林校 山元なぎさ 教諭

平成23年度の研究から見えてきた最重要課題である「着替え」について、教師間や家庭との共通理解や連携を図りながら実践された、具体的な取組を紹介されました。自立を促す工夫として、「環境整備」(集中できるためのついたてやカーテンの利用・シューズを置く場所の視覚的表示・身だしなみチェック用の鏡の設置・用途に応じた机椅子の配置など)と、「教材・教具の作成」(着替えの順番手がかり表全体用・着替えの手がかり表個人用・衣服をたたむためのツール)を行われ、効果的な成果を得ることができたとのことでした。

②中学部『キャリア教育の視点を踏まえた生徒の実態把握と教育活動の見直しを通して』

【発表】都城きりしま支援学校小林校 上園安二 教諭

PATHの手法を用いたグループワークを紹介されました。PATHとは、障がい者本人とそれに関わる多くの人々が、その人の夢や希望に基づいたゴール設定を行い、ゴールを達成するために開く会議です。生徒をいろいろな立場で支援する人になって夢や希望について話し合うことで、活発な意見交換ができたそうです。

③高等部『自立や社会参加を促す作業学習の在り方について』

【発表】都城きりしま支援学校小林校 深野慶一 教諭

コーヒー班、木工班、新作業計画検討班に分かれ、研究を進められました。作業の流れを確認する中で仕事のめあてを立て、返事や報告の仕方を練習し、生徒の実態にあった作業内容をできるだけ多く計画したということです。作業の流れや観点に、挨拶やコミュニケーションの要素が含まれており、現場実習や将来のライフステージに役立つ練習や訓練ができたそうです。

(2) 「個別の指導計画の見直しについて」

【発表】都城きりしま支援学校 甲斐猛文 教諭

通常学級と重複障がい学級の個別の指導計画のサンプルを抽出し、内容を各学年部で分析・結果の集約を行い、それを受けて見直しを進められたそうです。主な変更点は、「①全学部様式を統一する。②具体的な目標と観点を記入する。③学習内容段階表を活用して指導内容を記入する。④指導内容と指導方法を分けて記入する。⑤目標達成度を3段階で評価する。⑥3学期制から前期後期制にする。⑦保護者の意見欄を新設する。⑧通知表とのリンクを解消する。」ということでした。



【実践報告Ⅵ】

「共に伸びていく交流及び共同学習を目指して～ピオトープ交流のかかわりをおして～」

【発表】宮崎大学教育文化学部附属中学校 小野智弘 教諭

講座は次のような内容でした。

- 1 宮大附属中の交流及び共同学習について
- 2 交流及び共同学習の研究について(附属小との共同研究)
- 3 ピオトープ交流について
- 4 意識の変容について

特に講座の中心は「3 ピオトープ交流について」でした。

- ピオトープのメリット
- ピオトープ交流の内容



○ ビオトープの工夫

ビオトープ交流を通じた意識の変容から次のようなことが導き出されました。

交流及び共同学習を実施することにより、通常の学級の生徒が特別支援学級の生徒に対する意識の高まりが見られる。しかし、時間がたつにつれてその意識も下がる傾向があるので、継続的な交流及び共同学習を計画実施することで、より確固とした意識面の高まりが期待できる。

途中生徒の活動の様子をビデオで紹介するなど、とても分かりやすい講座でした。質疑応答でも活発な意見が出されました。

【講座Ⅶ】

「発達障がいのある人たちの支援と連携のあり方」

【講師】小野 公治氏（宮崎県中央発達障害者支援センター）

昨年度から、ひまわり学園で知的障がいを伴う子ども等に関わり、何が効果があるのかについて検証されており、具体的な事例を提示しながらの講義でした。

自閉症スペクトラムと言われる人たちは、周囲の人たちと認知（見え方、聞こえ方、聞き方、感じ方）の違いがあるということを理解してほしい。周囲の人たちと同じように生活するには、支援ツールが必要で、それは、その人に必要か、必要でないか、という点がポイントになる。安定しているときに的確な支援が必要で、スキルを教えていくと身に付きやすい。

また、支援者との信頼関係は、言葉で言うのは簡単であるが、発達障がいの人とは難しい。大事なことは『ブレない』事で、約束は『守れる約束』をするという点である。人が人に直接伝えると、ブレてしまうので、人と人がつながれるツールを、視覚的材料等を活用しながら作っていくと良い。そして、笑顔で「できたら、ほめる」ということを低学年で行うと効果的である。言語でのコミュニケーションではなく、人間とのやりとりであることを十分理解し、善悪の判断を曖昧にせず、しっかり社会性を育てる。

事例を交えての講義で、より具体的な手だてや支援の方法が分かり、今後自分はどういう支援をすればよいのかを示唆していただけたような気がします。



【講座Ⅷ】

「Dyslexiaを中心とした『量の障がい』と 自閉症Spectrumの範囲にある『質の障がい』を中心とした児童・生徒に関する情報」

【発表】みやざき中央支援学校 足立明彦 教諭

通常の学校・通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする子どもたちの適切な理解と適切な支援の方向に関する内容でした。人の、見えやすい障がいは‘ハンディキャップ’として捉えられ、支援の内容も見えますが、LD や ADHD、ASD や HFA は障がいが見えずらく、本人の努力不足だと誤解されやすい。そのため、適切な理解と支援が必要である。

LD や ADHD は「量」の障がい。了解可能、見え方、聞こえ方、知覚処理等の違いから行動・理解が多すぎ、少なすぎの問題といえ、ASD や HFA は「質」の障がいもの見方や感じ方（感覚）の違いといえる、とのことでした。

ディスレクシアは文字認識の仕方、文字読に対する脳の仕組みからくる生活の中での困り事であり、練習すればできるようになるものではない。肝心なことは、本人が本人の困り感の有無を的確に捉えて教師側が適切な支援を準備できるかどうかであり、基本的な支援の仕方を知り、そして本人に対しての具体的な支援を行って行くことであると述べられました。



【展示部門の様子】

